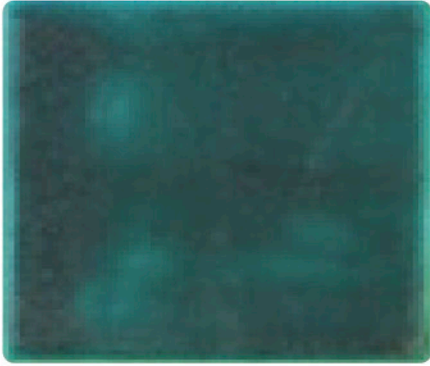


やましる町並み読本



開湯千三百年の歴史を 受け継ぐ「やましろ」。

萬松園の豊かな緑を背に

「湯の曲輪」を中心として

江戸時代から平成の世に建造された

温泉街のあちこちに佇む

古風で魅力的な町並みを観賞しながら

ゆっくり「やましろ」を巡ろう。

温泉寺縁起図（おんせんじえんぎず）／薬王院蔵 【市指定文化財】

嘉永五年（一八五二）に小島春晁（こじましゅんちやう）が描いた縁起図。高僧行基による温泉の発見、花山法皇の勅願を受けて後年に明覚上人による七堂伽藍建立、明智光秀の入湯などの薬王院温泉寺の由来が描かれている。小島春晁は大乗寺藩士で、江戸後期の写実的風景画家である谷文晁（たにぶんちやう）（一七六一―一八四〇）の弟子として活躍。幾多の秀作を残している。



山背の温泉街を見守る「寺社群」	4頁
日本の温泉の原風景「湯の曲輪」	5頁
湯の曲輪の主役「古総湯」	6頁
湯の曲輪の名脇役「総湯」	7頁
湯の曲輪の箱庭「はづちを楽堂」	8頁
魯山人の寓居「いろは草庵」	9頁
九谷焼文化が息づく「須田菁華」	10頁
古の陶工達を偲ぶ「九谷焼窯跡展示館」	11頁
町屋の町並みが残る「温泉通り界限」	12頁
とっておきの散歩みち「路地」	12頁
いろいろ楽しい「木看板とのれん」	13頁

ゆっくり観る。
 ゆっくり巡る。
 やましろマップ。



... 旅館・ホテル
P ... 駐車場
♂ ♀ ... トイレ
CAN BUS ... キャンパス停留所
↑ ... キャンパス通行路線
🚲 ... やましろレンタサイクル



ゆるやかな起伏のある
 自然散歩道をたどりながら、
 健康に良し、祈願成就に良しと、
 自然の恵みと霊験あらたかな
 神仏の魂が宿る山代随一の
 パワースポットです。

山背の温泉街を見守る 寺社群



見どころ③

【薬王院温泉寺】 お薬師さんこと「薬王院温泉寺」は、神亀2年(725)、僧行基が白山登山の折に温泉を発見し、薬師如来などを彫って守護としたのが始まりです。朱塗りの山門を入ると閑静な境内には十一面観音菩薩をはじめ、多くの文化財が佇んでいます。



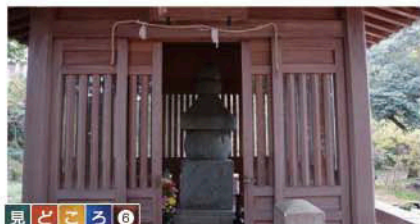
見どころ②

【専光寺】 浄土真宗大谷派の寺院。境内には、お光、幸蔵(久蔵)の恋物語の舞台となった太鼓の堂や蓮如上人の袈裟掛け、数珠掛けの松といわれる樹齢500年の松の木があります。



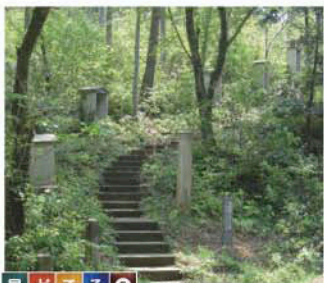
見どころ①

【服部神社】 社名の「服部」の語源は、「はとり、機織(はたおり)」の意と伝えられています。拝殿正面までの石段は108段あり、この石段をお百度参りすると子供が授かると言われていています。



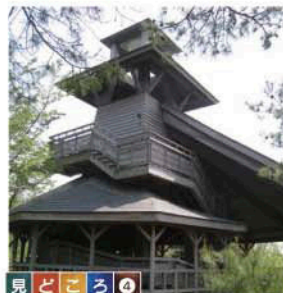
見どころ⑥

【明覚上人の碑／五輪の塔】 明覚上人の供養塔は、国指定重要有形文化財。鎌倉時代の仏塔は、風化による傷みが激しいため覆屋で保護されています。下から方形(地輪)、円形(水輪)、三角形(火輪)、半月形(風輪)、宝珠形(空輪)によって構成され、古代インドにおいて宇宙の構成要素、元素と考えられた五大を象徴しています。



見どころ⑤

【萬松園八十八ヶ所加賀霊場】 西国八十八箇所めぐりを模した石仏が坂道に沿って順番に並んでいます。どれも表情豊かで、ひととき疲れを忘れさせてくれます。



見どころ④

【栄螺堂】 江戸時代後期の栄螺堂と呼ばれる建築様式の仏堂を模した展望台。山代の町並みを一望でき、白山も眺望できます。

千古の伝統を誇る山代温泉の背後に広がる萬松園の豊かな緑を拝して、2つの寺社が鎮座しています。湯守寺である「薬王院温泉寺」、機織の神、天羽鉾雄神(あめのはづちをのかみ)を祀る「服部神社」。樹齢二〇〇年以上の巨樹が林立し、紅に染まる秋の紅葉が壮麗な鎮守の森です。



「湯の曲輪」は、まさに山代温泉のシンボル。
古総湯をぐるりと囲んだ温泉情緒ある空間は、
名湯の呼び名にふさわしい風景です。

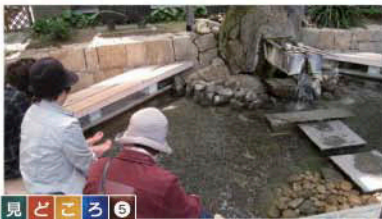
湯の曲輪

日本の温泉の原風景



見どころ④

【昔の表構えの復活】 覆っていた看板などを剥ぎ取り、伝統的な木造建物として2軒の建物が生まれ変わりました。



見どころ⑤

【源泉(足湯・飲泉)】 薬王院の本尊、薬師瑠璃光如来にちなみ「源泉・瑠璃光」の足湯が楽しめる休憩処、飲泉も可。近隣の館主が手入れする山野草も見どころ。



見どころ⑥

【温泉たまご】 「湯の曲輪」では、総湯、前川、あらや、おみやげ処、庵の4軒で温泉たまごを販売。それぞれに卵や製法にこだわった味自慢。



見どころ①

【白銀屋】 築180年を越える白銀屋本館は、国の登録有形文化財の中で宿泊可能な旅館建築では、日本最古とされています。



見どころ③

【やましろ湯の曲輪屋台】 加賀杉を使い、格子をはめ込んだ屋台では、地酒やお食事が楽しめます。



見どころ②

【九谷焼体験ギャラリー CoCo】 若手九谷焼作家の夫婦が営むお店で、展示・販売するほか、絵付け体験もでき、九谷焼を身近に感じることが出来ます。

江戸時代より総湯を中心に「がわ十八軒」と言われた「湯の曲輪」は、日本の温泉文化を正しく伝えていきます。復元した古総湯、新築の総湯をはじめ、湯宿や茶店、土産屋などが軒を連ね、往時の町並みが復興しつつあります。

湯の曲輪の主演

古総湯

「湯の曲輪」の中心にあるのが、明治十九年（一八八六）築の総湯を復元した「古総湯」。無垢の自然木で覆われ、山代の歴史の重みとともに、品格を感じさせます。四方八方どこからでも入ることができ、建物とともに当時の入浴心得も再現した「体験温泉博物館」です。



二層南北棟寄棟造瓦葺き・下屋柿葺の木造建築物。大屋根は、登窯で焼成した古瓦で葺いた赤瓦です。外壁は能登ヒバを使用し、白木のままで仕上げています。設計は燦文化財保存計画協会。

歴代の総湯たち



明治時代



大正時代



昭和初期



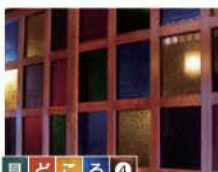
昭和四十年代

古総湯復元を通して

総湯は、まだ内湯のない旅館の共同浴場として、旅館街の中心に配置されていたものです。湯治にきた人々がゆつくりおしゃべりをしながら疲れを癒す場だったでしょう。山代温泉の湯の曲輪（がわ）のように、四角い広場の真中に総湯があり、その周りを旅館が取り囲むという古い配置をそのまま残しているところは他にありません。総湯は開湯以来何度も建て替えられてきましたが、今回復元された古総湯は、明治十九年（一八八六）に建て替えられたものを対象としました。この古総湯は、洋風建築の影響を受けたものです。時代の最先端を目指すという当時の山代の心意気を感じます。今後古総湯と総湯の二つの総湯が市民と観光客に親しまれ、温泉文化の象徴として生き続けていくことを期待します。

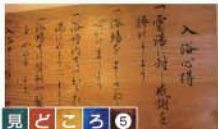
修復建築家 矢野和之

1946年、熊本県生まれ。武威工業大学大学院工学研究科修了。(株)文化財保存計画協会代表取締役。駒澤大学文学部非常勤講師、東京都立大学大学院非常勤講師、文化財建造物や史跡等の保存修復等を手がける。



見どころ④

【ステンドグラス】浴室や二階休憩所には当時の流行の先端だったステンドグラスを取り入れています。



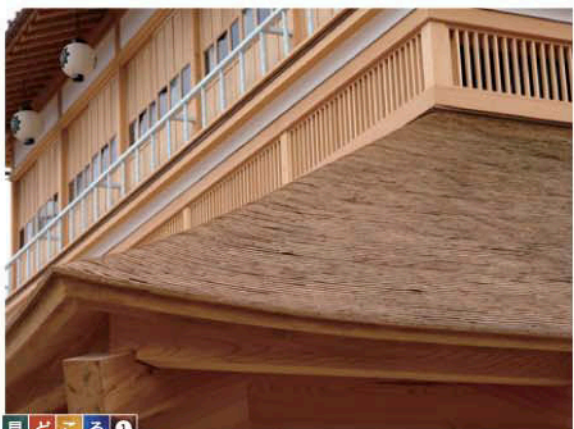
見どころ⑤

【入浴心得】「霊湯に対し感謝を捧げましょう」から始まる五ヶ条の「入浴心得」は必見!



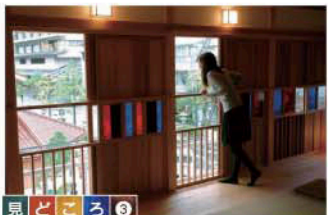
見どころ⑥

【浴場タイル】日本で初めてタイルを使った公衆浴場で九谷焼を使っていました。加賀九谷陶磁器協同組合により、染付技法により復元されました。床は滑り止めを施した九谷焼タイル。



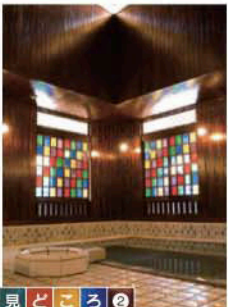
見どころ①

【こけら葺き】屋根葺き手法の一つで、数ミリの薄板を重ね合わせて施工しています。「こけら」は、「こけら落とし」と同様に木片や木屑の意味。



見どころ③

【二階休憩所】天然木と白漆喰で仕上げられた休憩所は、四方から「湯の曲輪」を約6mの高さから見下ろすことができ、まさに展望台。



見どころ②

【浴場】源泉かけ流し100%の新鮮なお湯が楽しめます。拭き漆仕上げの板壁は落ち着きます。

湯の曲輪の名脇役

総湯

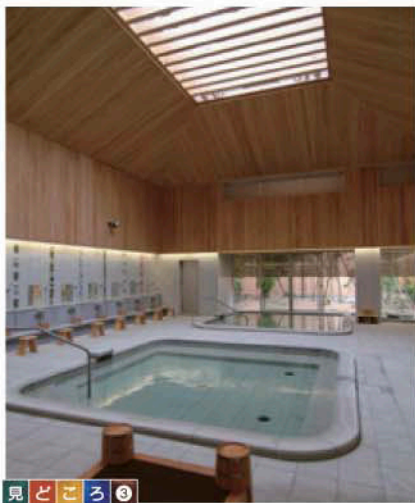
毎日、地元の老若男女が疲れをとり、よもやま話して賑わうのが「総湯」。加賀地方の伝統的な農家建築を模し、幅広い破風板を施した切妻の赤瓦の大屋根と無垢の板張り壁が印象に残ります。総湯の場所は、「がわ十八軒」の一つ吉野屋旅館でした。



大屋根と下屋は、加賀地方の赤瓦を葺き、外壁は地場産杉を使用した縦羽目板目板張りで仕上げています。古総湯の脇役としながらも凛と佇む姿が印象的です。設計は内藤廣建築設計事務所。

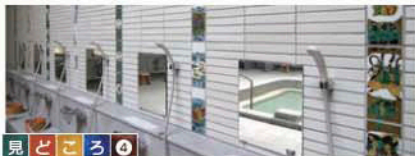
十年ほどの間、山代温泉の街造りに関わってきました。行基上人以来、山代温泉は湯の曲輪を中心に一三〇〇年の歴史を刻んできました。その中心が総湯です。永らく市民に親しまれてきた総湯ですが、街のイメージを一新する為に建て替えることになりました。湯の曲輪に面した老舗の吉野屋旅館さんの土地が空いたので、そこに新たな総湯を建て、湯の曲輪の中心である元の総湯の場所には、明治期の古写真をもとに古総湯を建てることになりました。古総湯は湯の曲輪再生の主役ですから、新しい総湯は脇役です。存在感はあるけれど自己主張しない、そんな淡い役回りですが、古総湯を引き立てるよう、また、湯の曲輪の雰囲気を感じ立てるような外観の建物になったと思います。

山代の町並み考



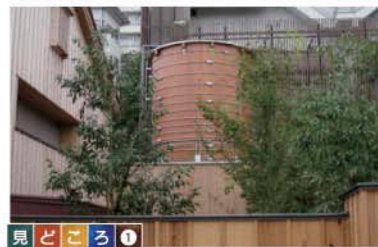
見どころ③

【浴場】 大きな天窗で明るく開放感のある浴室。中庭や薬王院の緑が楽しめます。浴槽には加賀市水田丸の石、洗い場には小松の滝ヶ原石を使用。目が細かく耐久力があり、青味のある灰色が特徴です。



見どころ④

【浴場壁タイル】 壁には九谷焼現代作家30名が思いのままに描いた多彩な九谷焼タイルの絵柄が楽しめます。



見どころ①

【源泉槽】 通りから見える源泉槽は木槽とし、景観に配慮した心遣いが感じられます。



見どころ②

【門】 老舗・旧吉野屋旅館の門をそのまま活かしました。ここをくぐって総湯に入ります。

建築家 内藤 廣

1950年、神奈川県生まれ。早稲田大学大学院理工学研究科建設工学修了。内藤廣建築設計事務所を主宰、東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻教授・副学長。代表作は海の博物館（三重県）、鳥根県芸術文化センターなど。



湯の曲輪の箱庭

はづちを楽堂



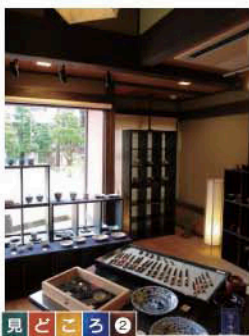
目を惹く赤瓦の大屋根に載る小さな屋根は、「越屋根」といい、本来は煙を出すために作られたものです。3棟の設計は、地元の小島環境設計、バルテノン設計、北陸設計。外構は瀬戸設計事務所、全体を内藤彦建築設計事務所が監修。

「はづちを」の名は、服部神社に祭られる機織りの神、天羽槌雄（あめのはづちを）神に由来します。敷地内に配置された三棟の紅殻風木造平屋建ての建物は、路地裏を歩く気分させ、自然と人の流れを吸い込むような異域性を味わうことができます。



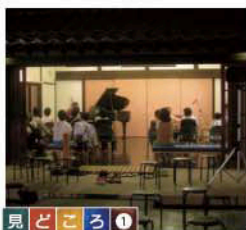
見どころ③

【中庭】通り側に庭木を植え、小池や水路を施した中庭は、温泉街のオアシスとして、住民や観光客に親しまれています。



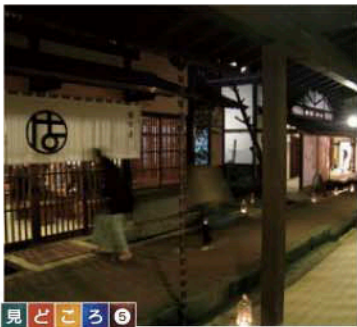
見どころ②

【文化座】「丹塗り屋」がある文化座には九谷焼作家の作品をはじめ、地元の名物土産がずらりと並んでいます。



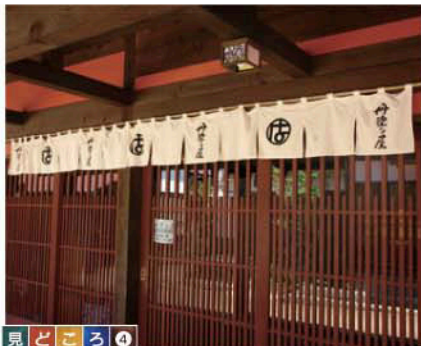
見どころ①

【寿座】コンサートや各種教室、講演会が開かれています。



見どころ⑤

【春日座】「はづちを茶店」がある春日座には、地元食材を用いた食事や甘味、地酒などが味わえます。



見どころ④

【紅殻格子】朱塗りの壁や紅殻格子は、繊細な美しさとともに温泉街の艶を感じさせます。

野村万之丞 狂言師

一九五九（二〇〇四年、東京都生まれ。野村万蔵家当主を引き継ぐとともに五世万之丞を襲名。万蔵家当主として他に長野パラリンピック、国民文化祭のプロジェクトなど、総合芸術家として多岐に渡り活躍。野村万蔵家は、加賀前田藩お抱えの狂言師であり、NHK大河ドラマ「利家とまつ」の芸能考証を務め、平成八年より山代大田楽の総合演出を手がけた。

いろは草庵

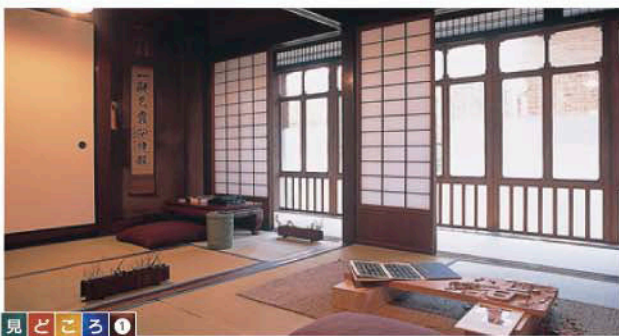
大正時代の旅館の旦那衆は、茶道、書、骨董に造詣が深い風流人でした。魯山人は、魯山人は、旅館・吉野屋の別荘であったこの山荘に逗留して、旅館の看板を彫り、加賀の豊富な食材を使った料理を味わいながら、旅館の旦那衆との交流を楽しんでいました。



明治初期に建てられた木造瓦葺二階建ての母屋と土蔵で構成。傷んだ部分だけを修復し、ほぼ当時のままで保存・公開されています。亀甲デザインが監修。【国登録有形文化財】



見どころ② 【中庭】母屋と蔵をつなぐ場所で苔むす庭を見ながら、お茶とお菓子がいただけます



見どころ① 【居室】柱は杉、梁は松を使い、紅殻を下塗りした後、漆で拭き上げた加賀地方特有の居室の雰囲気を感じることができます。田の字の間は、刻字看板を彫る仕事場などに使われています。



見どころ③ 【紅殻塗り・竹格子】真壁造りの梁や柱、壁に紅殻塗りを施し、窓や戸の格子に竹を使い、雅味のある表情を醸し出しています。

北大路魯山人 芸術家

一八八三〜一九五九年、京都上賀茂生まれ。本名房次郎。料理研究のかたわら食器製作を始め、多彩で斬新な陶器を制作。独学で書、篆刻、絵画にも天分を発揮。北陸路を食客生活を続けながら、大正四年（一九一五）に山代の地を訪れ、半年余りにわたり宿の主人たちとの交遊を通じて九谷焼に出会い、自作の器で食を楽しんだ。大正十二年には、須田善華窯で製陶に従事。その後、ひたすら陶芸に没頭し、生涯で二十万点とも言われる作品を制作したと言われている。大正期「美食倶楽部」「星岡茶寮」を創業、使用する一切の食器を創案製作した。山代の温泉街には、刻字看板や絵皿が数多く残っている。



九谷焼文化が息づく

須田菁華

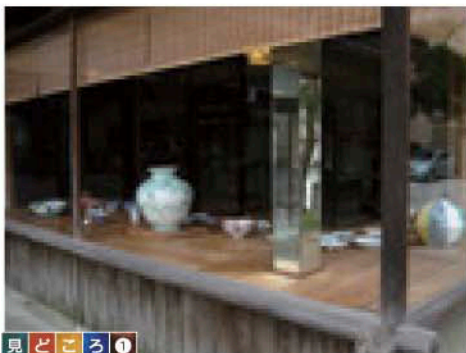
湯の曲輪から温泉通りを歩き、横みちに反れて坂を上ると広見の一角に須田菁華があります。広見は、かつての大火を教訓に真菰ヶ池からサイフォンの原理で防火用の池がありました。ここから、九谷焼窯跡展示館に至る小径は、九谷焼の里・山代の面影を垣間見ることが出来ます。



広見の角に沿った鍵型の入母屋黒瓦葺きの伝統的な木造家屋。昭和12年の大火に母屋の一部が焼失し、修繕増改築し、現在に至る。

初代・須田菁華 陶芸家

一八六二〜一九二七年、金沢生まれ。東京帝室博物館で古画の模写や石川眞勲業試験場陶画部をへて京都で製陶を学ぶ。その後、明治三十九年に山代の地で「菁華窯」を開く。魯山人との交遊は深く、菁華の葬儀のとき「翁は当代陶磁器界に於ける第一の異彩なり。美しくして浮華ならず、渋くして枯淡ならず。才あり、情あり、気あり、しかも識高く、独歩の觀ありとす」と尊敬していました。



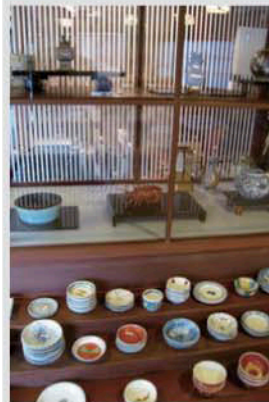
見どころ①

【大正のショーウィンドー】1階隅には、通し柱の外側に出窓があります。大正時代に流行したガラスを使ったモダンなショーウィンドーが今も現役で使われ、目を惹きます。



見どころ②

【明治の陳列棚】明治時代に制作されたガラスケースは、現代にもお手本になるモダンなデザイン。



見どころ③

【半数奇屋造り】柱や梁は、吉野杉や北山杉の丸太を使った品の良い半数奇屋造り。繊細な九谷焼の陶器とマッチする柔らかな空間を演出しています。



見どころ④

【篆刻看板】魯山人が製作した篆刻の看板が玄関口の軒下に掛けられています。山代には「吉野屋、あらや、白銀屋、菁華」の4枚の看板が残っています。

古の陶工達を偲ぶ

九谷焼窯跡展示館

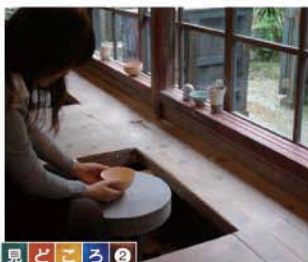


敷地内には、新旧の建物が調和の取れた状態で混在しています。窯跡覆屋と便所棟は内藤廣建築設計事務所。旧母屋と窯小屋は、地元の瀬戸設計事務所。これら全体を含めて敷地全体は、内藤廣建築設計事務所が監修。



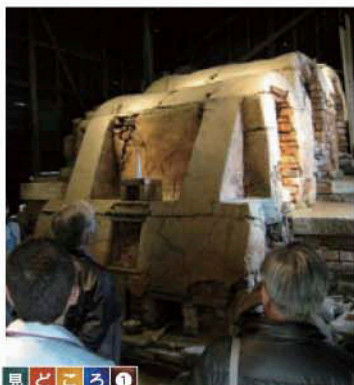
見どころ①

【旧母屋兼工房(展示棟)】 推定築200年程を経た建物。加賀地方の農家に多い木造妻入り赤瓦葺き2階建て。(市指定文化財)



見どころ②

【作業場】 旧母屋南側に轆轤場、剥がし場、絵付場が当時のままで並んでいます。



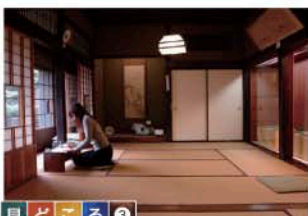
見どころ③

【本焼窯】 昭和15年に築造され、昭和40年まで使用。一回の焼成で約1,000個の製品を窯詰めしていました。



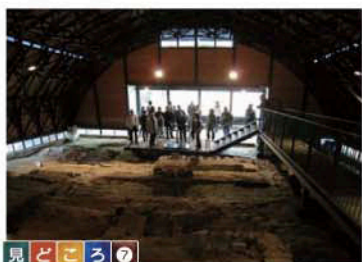
見どころ④

【窯跡覆屋】 鉄骨立体トラスシェルの構造。虚飾を施したシンプルな外観は周囲の環境に溶け込んでいます。



見どころ⑤

【加賀地方の座敷】 八畳と六畳の続き間の座敷は、作品展の場として使用。梁や柱に紅殻下地塗り拭き漆仕上げが施され、落ち着きのある和室は、ゆっくりと時間が過ぎていきます。



見どころ⑥

【再興九谷窯跡】 覆屋内には、再興九谷吉田屋以来の窯跡が発掘された状態のまま保存公開。(国指定史跡)



見どころ⑦

【絵付体験】 本格的な九谷焼の絵の具を使って、オリジナル作品が作れます。指導員が丁寧に絵付の仕方を指導。

古九谷再興を志して豊田伝右衛門は、九谷古窯に隣接して窯を開きました。九谷の地を去り、この山代越中谷に築窯。文政九年(一八二六)に窯を開きました。以来、この地から山代の九谷焼文化が連続と現在に受け継がれています。

豊田伝右衛門と吉田屋窯

吉田屋とは、大聖寺城下で代々続く豪商豊田氏の屋号です。四代豊田伝右衛門は、漢学・詩文・和歌・書・絵・篆刻などをたしなみ、豊田家歴代中もっとも博学多趣味の文人でした。吉田屋窯の作品は、赤の色絵顔料を使わない緑、紫、紺青、黄の四彩を用い、青手塗理手のものが特徴です。

赤の色絵顔料を使わない青手塗理手



町屋の町並みが残る

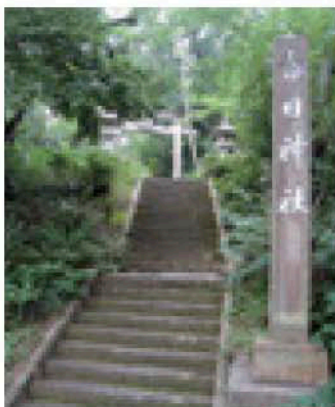
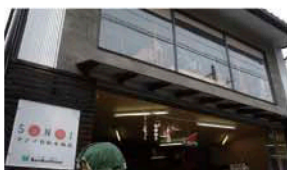
温泉通り界隈

おん せん とお

かい わい

かつて町屋が整然と建ち並び、美しさと賑わいのある町並みがありました。

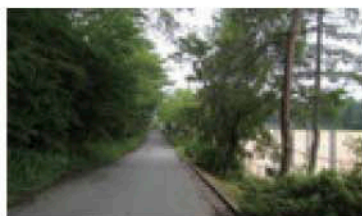
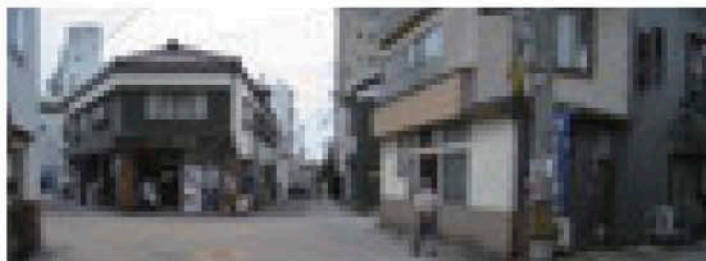
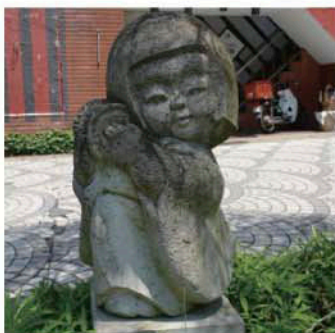
「湯の曲輪」に向かって真っ直ぐに伸びる「温泉通り」は、かつて町屋の町並みが軒を連ねていました。しかし、昭和十二年の大火により、通りのほとんどの建物は焼かれ、今では数件の商家でその面影が残っています。北陸特有の積雪や凍害に強い釉薬瓦で葺いた切妻平入り、袖壁などの伝統的な様式を見ることが出来ます。



路地

とつておきの散歩みち

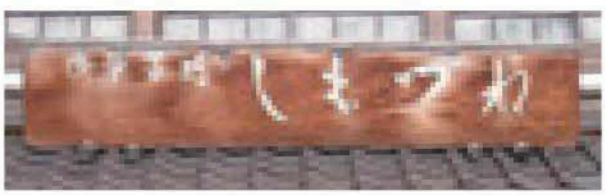
萬松園を背にした山代は、ゆるやかな起伏をもち、坂や曲がり、窪みなどの微地形が見られます。また、温泉街の華やかな通りをちよっと外れると、地元の人々の日常の営みを感じるホッとさせる風景に出会えます。



いろいろ楽しい

木看板とのれん

篆刻家・魯山人がこの地に逗留したことから、湯宿や土産屋には、個性的な木看板が目を見えます。下屋載せの大きな木看板や軒下の小看板など形や大きさもいろいろです。機織の神、天羽鉦雄神にあやかっていたのれんは、風になびき、柔らかな気持ちにさせてくれます。



山代温泉に最初に関わったのは二〇〇〇年の頃だからもう十年以上になる。初めはそぞろ歩きのためのサインデザインの提案であったと思う。山代のまち案内に適したサインはどんなものが相応しいか、地元の委員の皆さんと何度か会を重ね話し合った。最終的には本来、旅館や商店や史跡などそれぞれがサインになるべきで、「看板」的なものは、むしろまちの景観にとってマイナスになる、との考えで合意した。大切な事はもてなしの気持ちであり、山代に住むひとりひとりが案内人になる事が理想的、ということである。素晴らしい。結果、率先に山代の案内をいたしますよ、というマークのみを設置することになった。それが道番屋サインである。だが木製のサインはいずれ寿命がくる。しかしそれがなくなっても、山代の人々が気持ちよく来訪者をもてなす気持ちは残っていくであろう。

そぞろ歩きの演出



デザイナー 南雲勝志
新潟県六日町生まれ。東京造形大学室内建築科卒業後、永原浄デザイン研究所を経て、1987年ナグモデザイン事務所設立。景観・土木のデザインから家具、インテリア、照明デザインなど、様々な分野で活動中。著書「デザイン図鑑ナグモガタリ」など。

再興九谷の地・やましろを感じる趣向を凝らしたモニュメントや道標がまちかどに点在し、歩く楽しみが広がります。

温泉街回遊のコンシェルジュ「道番屋」サービス。軒下の木製看板が目印です。気軽に町人の親切なおもてなしの心と触れ合えます。

やましろ町並み作法「五箇条」

一、萬松園の豊かな緑に感謝しましょう。

一、調和の心構え、心配りをしましょう。

一、伝統的な造りを重んじましょう。

一、粹と艶の遊び心でもてなしましょう。

一、清らかで美しいまちづくりを心がけましょう。

「やましろ町並み読本」

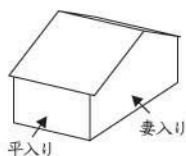
企画編集／株式会社風土研究所

【赤瓦(あかがわら)】かつて石川県内には良質の原土が採れ、九谷焼などの窯業技術を礎に瓦産地がいくつもあった。軸葉瓦である地元瓦は、積雪や凍害に強く長持ちする。金沢や能登では黒瓦だが、加賀地方では赤瓦が特徴。

【漆(うるし)】語源は「麗し(うるわし)」とも「潤し(うるおし)」とも言われている。古来より、塗料、接着剤として使用。加賀地方は「漆」に適した気候風土であり、加賀藩の文化振興も加わり、社寺をはじめ、庶民の家の柱、梁、造作などの内部木部全般の仕上げとして、拭き漆の手法が用いられてきた。

【加賀杉(かがすぎ)】杉は、県内でも古くから多く産出され、柔らかく加工がしやすいため、柱をはじめ、桁、鴨居、長押、板類、下地材、建具の建材として使用。地域で生まれ育った木は、同じ環境で使われるので、温度や湿度が変化する自然環境にも耐えて長持ちする。戦後の植林政策により、柱に使える樹齢四十年生前後ピークに本格的な利用時期を迎えており、積極的な使用が求められている。

【切妻屋根(きりづまやね)】屋根形状のひとつ。単に切妻ともいう。屋根の最頂部の棟から、本を伏せたような山形の形状をしたシンブルな屋根形状。ローコストで雨漏りの心配が少なく、雪が積もりにくい。また、雪の重量による倒壊の危険が小さいという利点も併せ持つ。建物のいずれの面に正面出入口があるかによって、「妻」側から出入りするものを妻入り、「平」の側に出入口があるものを平入りという。街道沿いの商家等の町家建築には平入りが多い。

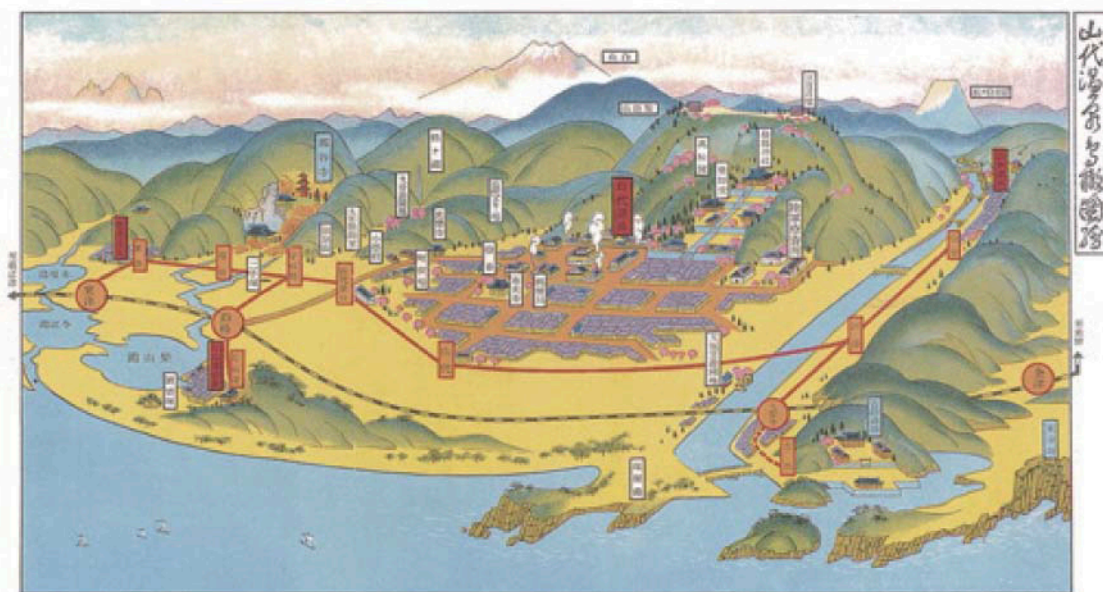


【格子(こうし)】細い角材や竹などを、基盤の目のように組み合わせて作った建具。戸・窓などに用いる。内部での採光と通風を確保しつつ、外部からの進入と視界を制限できる効果がある。装飾的な効果もあるため、商家の業種によって意匠が分類されるなどの特徴がある。

【漆喰(じゆく)】瓦や石材の接着や目地の充填、壁の上塗りなどに使われる消石灰を主成分とした建材。白漆喰が一般的だが、墨を混ぜた黒漆喰も仕上げは、昔の高級宿や料亭、裕福な家屋の廊下などに施工されていた。山代では、紅殻などを混ぜた粹で艶のある外壁が見られる。

【真壁造り(しんかべづくり)】柱や梁が現れる構法を「真壁造り」といい、木造建築における伝統的構法。「大壁造り」は、柱や梁を壁の中へ隠した現代的な構法。

【紅殻(べんがら)】弁柄とも言う。かつてインドのベンガル地方産のものを輸入したために「べんがら」と名づけられた。赤色顔料のひとつで、成分は酸化第二鉄。着色力・隠蔽力があり、耐久性に優れ、安価で人体にも安全なため、用途は多い。加賀地方で産出される杉は、赤身(心材)と白太(辺材)が混じり、良質の木材が揃えにくいときに粗隠し(色付け)に用い、拭き漆による仕上げで重厚で美しい質感が得られるのが特徴。



発行日／平成 23 年 1 月

発行者／山代温泉再生協議会・社団法人 加賀建設業協会
〒922-0816 石川県加賀市大聖寺東町 2 丁目 6 番地



山代温泉観光協会
〒922-0243 石川県加賀市山代温泉北部 3 丁目 70 番地 TEL 0761-77-1144
平成 21 年度 建設業と地域の元気回復助成事業
国土交通省総合政策局